



# 花火と鉄球



鉄球（てつきゅう）

長い黒いアスファルトの一本道に沿って夜店がどこまでも続いている。

すぐ近くには川があり水の流れる音が聞こえてくる。道ゆく人たちの手にはフランクフルトや綿菓子なんか握られている。カラフルな浴衣姿で歩いている女の子たちがとても頻繁に目についた。今日はこの地域で一番大きな花火大会の日だ。

「ねえ、きれいね」

そういいながら彼女は上空を指さした。ワントempo遅れて僕は顔をあげた。

「ちょっと遅いわよ。とろいわね」

僕が見た夜空にはすでに花火の残骸がわずかに発光しているだけだった。そしてそれも瞬く間に消えていった。

「まあ、いつものことかしら」

彼女はため息を漏らしたあとジュースのストローに口をつけた。彼女とは友人の紹介で数カ月前から付き合っている。同じ大学だけど、学部は別々だ。僕は経済学部、彼女は外国語学部だ。学年は同じ。

「向こう側にいったら、花火を見る専用の席が用意されているらしいよ」

僕はそうやって川に掛る橋を指差した。

「そう？ ちょっと遠いわね。まあいいわ、いこうかしら」

橋は2車線の道路が走っていて、右側に歩行者専用路が設けてある。ずいぶん大きな橋だ。黄色を基調とした浴衣を着た彼女はジュースを片手に終始ご機嫌ななめだった。そしてそれは今日に限らずいつものことでもあった。ずっと奥手だった僕はこれまで女の子と付き合ったことがなく、彼女が初めて付き合う女性だった。それゆえ、どう接していいのかよく分からないでいた。

橋を渡っている間も花火はどんどん打ち上げられた。シンプルな花びら型のものから、蝶々をかたどったもの、小柄なものながら連発で打ち上げられるもの、たくさんの種類の花火が夜空を華やかに彩った。そんな光景を目にして、彼女の機嫌もいくぶんかは良くなっていったような気がした。

そんな時、僕の視界の隅で何かが動いた気がした。なぜだか無性に気になった。すぐにその方向を見てみた。橋の下ようだ。よく確認するため欄干にまで寄って下の河原を見た。どうも数人の方がそこにいるようだけど、暗くはつきりとは分からない。

「ちょっと、突然なにしているのよ」

「いや、ごめん……、なにか気になって」

花火でめずらしく機嫌のやわらいだ彼女だったが、再び顔をしかめてしまった。これ以上不機嫌にさせないために僕はまた彼女の隣に戻って歩き始めた。なんだか分からないけれど橋の下が無性に気になってしょうがなかった。

長い橋を渡りきると、こちら側も川沿いの道には夜店がずらりと並んでいた。こっちのほうがより賑わっている様子だった。近くには神社があり、境内にもたくさんのお店がひしめいている。

「あっ、なおこ？」

しばらく道を歩いていると、女の子が突然声を掛けてきた。

「ようこじゃない、来てたんだ」

どうやら彼女の知合いのようだ。浴衣は着ておらず、普通の洋服を身に着けていた。

「あ〜っ、おとこ連れてるう」

そう揶揄された彼女は顔を赤らめた。そして顔の前で手を振って弁解をはじめた。

「いやいや、つまらない男よ。いつもぼ〜っとしてるんだから。まったくよ、まったくなのよ」

僕はまるで母親に叱られる子供のような気持ちになった。

「それより一人なの？ あぶなくない」

「そこの神社に友達がいるのよ。わたしはちょっと川沿いのお店も物色しに来たってだけ。だって、こっちにすごい美味しそうなのがあったら悔しいでしょ？」

二人は声をそろえて笑った。その後まるで僕などいないかのように二人は楽しく話を展開した。

「ちょっとトイレ行ってきていいかな」

僕が思い切ってそう言いますと彼女は、「こんなところで女の子だけにするとはいけしからんことである」的な文句を少しだけ言ったあと、OKが出された。

「ごめん、すぐ帰ってくるから」

その場を少し離れてから、確認のために振り返ってみた。二人のおしゃべりはどんどんヒートアップしているようだった。それをより盛り上げるかのように背後で花火が上がっていた。僕はトイレを急いだ。ずっとがまんしていたのだ。

混んでいるだろう思っていたトイレは予想に反してがらがらだった。他に花火大会用の特設トイレでも設置されているのかもしれない。

用を済ませると、すぐに戻ることにした。寄り道して長くなってしまったら彼女達に何を言われるか分かったものではない。

そのとき、突然、僕の内部で何かがくすぐったような気がした。まるで細長い糸のような生き物が胸のあたりにいて、自分に何かを知らせているかのようなようだった。おもわず僕は橋の架かる方向を見てしまっていた。

橋の近くには川原に下りる階段が設置されてた。自然と僕の足はそちらの方向に歩きだしていた。

アスファルトで固められた階段の両側には鉄製の手すりが設置されている。手すりに触れると、表面のペンキがぼろぼろに剥がれていて手のひらを刺した。階段の下は暗くとはっきりとは見えない。僕はおそろおそろ下へと降りていった。夜店がひしめく道路とは違い、どんどん暗く陰鬱になってゆく。次第にあちこちで鳴く虫の音がはっきりと耳に入ってきた。

右足がやわらかい土の感触を捉えた。階段を降り切ったようだ。あたりはずいぶん暗い。雑草の青臭さが鼻をついてくる。遠く離れたところでは花火師の人達が打ち上げ作業をしているのが見えた。僕は彼らのいるところとは別方向に足を進めた。川原には橋を支える立派な鉄柱が何本も建っている。僕が橋の上から人影を見たのは、もう少し川に近いところだったはずだ。

橋の下はとても暗く、怖かった。目的の場所に近づくとつれてその恐怖感は次第に増幅していった。

しばらく川原の小石の上を、じゃりじゃりと音を立てながら歩いた。しばらくして目的の場所付近に到着した。するとやはり人影が見えた。橋の下の極めて闇の深い場所で数人の人が膝を曲げて座っている。皆、同じ方向を向いており花火には背を向ける形だ。僕はもう少し近づいてみることにした。

できるだけゆっくりと歩いたのだけれど、川原に敷きつめられた小石のせいでどうしても足音は消すことができなかった。にもかかわらず、そこにしゃがんでいる人たちは誰も僕のほうを振り返ろうとしない。いったい何をしているのだろうか。花火を見ているのではないことは確かなようだ。

近づくと、人数は7、8人ぐらいであることが確認できた。ふと、後方で花火が上がった。瞬間、この場の空気を変質したのを感じた。胸が苦しくなるような重たい雰囲気だった。同時に僕の目に一瞬、不可解なものが映った。花火の光で僅かに何かが照らされたのだ。ここにいる人の視線はすべてそれに集中しているらしかった。

僕はみんなの一番後ろでしゃがみこんだ。あれは何だったのだろうか。一瞬のことだったため、何であるのかよく分からなかった。

しばらくして再び花火が夜空にあがってゆく、ひゅーっという音が聞こえた。そしてその後、大きな爆発音。今度は見逃さないようにしっかりと目を見開いた。

僕の目には丸いボールのようなものが映った。大きさはサッカーボールくらい。材質はおそらく鉄。表面は光沢があり、花火の光を鈍くなめらかに反射させた。

突然、僕の頭の中と胸のあたりがひどく疼いた。まるで光が一瞬で眼球を通過して脳と胸に侵入していったような感覚だった。それからその鈍い光は、僕をわずかに攪乱させた。頭がぐらくらし、胸がどうにも切なくなった。気持ちがいいのか、悪いのかがよく分からなかった。

さらに後方で花火が上がった。

川原の小石の上に置かれたその鉄球は再び光を反射させた。僕は凝視した。

さきほどよりも多くの光が僕の中に入り込んでいった。胸の中心がひどく熱をもったような気がした。気がしたと思ったら、瞬間、その熱はじゅわっと体じゅうに広がっていった。なんだか怖い感覚だったけど、同時におそろしく気持ちがよくもあった。

それとともに頭の中では、ちかっ、ちかっとして光が明滅を繰り返していた。鉄球に反射された花火の光が、脳内で僕を弄んでいるみたいだった。ちかっ、と光った瞬間は恐怖感があるのだが、消えていくと同時になぜか解放感があった。いつの間にか僕は鉄球と、鉄球に反射する光の虜になっていた。

最後を締めくくる大型花火が打ち上げられたあと、僕たちはしばらく余韻に浸っていた。どれだけ橋の下にいたのか分からない。気がつくと、一人またひとりと立ち上がり、無言でその場を後にする人がではじめた。それに気づいた僕も、ようやく腰をあげた。立ちあがると足がひどく痺れていた。

川原の上にある夜店の明かりはほとんどが消えてしまっていた。橋の下はあまりにも暗かった。鉄球が置いてあった場所は、もう闇が深すぎてまったく見るができない。すぐ近くでうずくまっている人の背中だけがぼんやり目に映った。僕はゆっくりとその場を後にすることにした。

階段に向かって歩いていると、自分の身体がものすごく熱を持っていることに気がついた。大量の汗でTシャツがぴったりと身体にへばりついている。

我も忘れるほどに鉄球に集中していたようだ。こんな体験は生まれて初めてだった。僕はところが妙に高揚しているのを感じた。

そのとき、突然、風が吹いた。夏の夜の冷たい風だった。

僕はとてつもない爽快感でいっぱいになった。